
物語に登場する主人公は必ず美形である。

零里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語に登場する主人公は必ず美形である。

【Nコード】

N0618G

【作者名】

澪里

【あらすじ】

江戸川コナンから工藤真一へ。紆余曲折の末、元の身体を取り戻して1年経ったある日、偽名を名乗る謎の女性から依頼状を受け取る。

依頼内容は「多くの探偵たちと謎を解いて欲しい」
様々な探偵たちが勢ぞろいする中、依頼人は殺害された。
犯人は誰か？目的はなんなのか？なぜ、依頼人は探偵たちを集めたのか？

そこには、依頼人の悲しい過去が
…

「皆さん、どうか…どうか。私を忘れないで、ください」

「あなたは容疑者であって、被害者だ」

「悲劇を悲劇と決め付けるのは、他者なんですよ」

「こんなの、認められるわけない！間違っているのは、アンタだ！」

第一話　始まりの鐘

「おまえ、あほだろ？」

「はあ？」

西の探偵こと、服部平次は出会い早々言われたセリフに間抜けな声を上げた。

その人物は言うまでもなく東の名探偵、工藤新一だ。

「ちよいまち。会って第一声がそれかあ？意味不明やんけ。」

顔をゆがめながらそう言い放つ平次は現在、工藤邸の玄関にいる。「オメーのほうが意味不明だ。だいたいなんで平日のこんな朝っぱらからここにいやがんだっ！」

現在の時刻、7時。そして、新一は連続して鳴らすインターホンの音にたたき起こされたのだった。

「工藤がゆーたんやないか。明日はよこいって。なんや、遅いか？」
頭上にはてなマークをとばしながら、平次は首を傾げた。

「いつや。早すぎるんだよ、この非常識男っ！」

その後、新一の黄金蹴りが炸裂した。

それは二日前にさかのぼる。その日、学校を早退して、警察の要請に行っていた新一は、郵便受けに入っていた薄黄緑色の封筒を見つけた。

『工藤新一様』

拝啓

突然のお手紙申し訳ありません。私、七宮 藍と申します。

今回、お手紙を差し上げた理由は、かの名探偵、工藤新一さんに是非とも事件依頼をしたいからです。

引き受けてくださる場合は、是非とも事情を直接話したいと思っ

ております。つきましては、二日後の午後一時、三葉駅前の喫茶店「パール」で、お待ちしております。
なお、工藤さん以外にも多くの探偵を招いていますので、それをご了承ください。では。

0月20日 七宮 藍

1

「なんじゃこりゃあ？」

とっても簡潔な依頼内容分に新一は間抜けな声を上げたのだった。
（なんだ、この依頼？ 第一、簡潔すぎるし、二日後って急すぎだろ。それになんだ？ 「多くの探偵」って。そしたら、俺、必要なくねえ？ 依頼料のこと書いてないし。）

多くの疑問が新一の頭の中をひしめき合う。そして次には不敵な笑みを浮かべた顔があった。

「おもしれーじゃねーか」

そういつた時点で、新一の中ではこの依頼を受けることは決定事項になっていた。

「でも、この多くの探偵って、もしかして……。」

プルルルッ・プルルルッ……

タイミングよく電話が鳴ったと思うと、それは今考えていた人物だった。

『よう、工藤。久々やな。元気しottaか？』

「服部……。やっぱりオメーか。」

『む。ということは、おまえんどこにも来たんやな？』

「ああ。この薄黄緑色の封筒がな。」

『へえ。俺んとはピンクやで。ピンク。変わってんで』

「ピンク？ 何でわざわざ封筒の色を変えてんだ？ 送り主の七宮さんは。」

『七宮あ？俺んとは七瀬やで。偽名かいな』

「・・・だな。どうして、だ？」

『電話で話しても、らちあかん。とりあえず、二日後、そっち行こうさかい。よろしく頼むで』

「泊めねーからな。早めにこいよ。じゃーな」

『ええ！ちよ・・・』

新一は返事を聞く前に切ってしまった。その顔は探偵の、不敵な笑みだった。

「たく。いつ家を出たらこんな時間にこれんだよ」

大体、大阪から新幹線出てんのか？とぶちぶち文句を言いながら、着替えてきた新一はただいまソファでコーヒー飲んでいた。

勿論入れたのは、平次である。

「まーまー。そうかつかせんでもええやんか。減るもんやないし」

「冗談じゃない、安眠妨害だ！！」

「で、早く着たからには何かあったんだろ？ってかなきゃ許さん」

新一は横目で平次をにらみながら言った。しかし、それとなく眼を泳がせている平次に気づいていた。

「あ、あはははは・・・。スンマセン、ナイデス」

実は、もともと新一は顔が美人といわれることが多く、平次も肌が黒くて分かりにくいが多少赤くなっていたりする。（＋寝起き）

「ったく。いいか、俺は寝起きで超機嫌がわりいんだ！朝食ぐらい作れよ！」

「へえ〜〜い」

さて、前置きはこの位でいいだろうか。改めて、紹介しようと思う。

今、平次に入れてもらったブラックコーヒーを飲んでいるのは、かの有名な名探偵「平成のシャーロックホームズ」と呼ばれた工藤新一だ。

成績優秀、美人、性格よし・・・とされているがこれは猫かぶりで、

本当は低血圧だし、面倒ぐさかり屋だし、口悪いし・・・と。

新一は黒の組織に体を小さくされ、コナンとなったが、灰原の手で APXN4869 の解毒剤が完成したため、新一に戻り、黒の組織を崩壊まで追い込んだ。しかし、肝心なジンとウォッカとベルモットは行方知れずである。

そして今、新一は無事高校を卒業、帝都大学心理学部に在学中。目下、現役の名探偵だ。

次にこの新一に睨まれ、顔を赤くしながら青くしているという・・・奇妙にも器用なことをしているのが服部平次だ。

平次は大阪府警本部長の服部平蔵を父に持つ探偵だ。

高校生時代には新一と肩を並べる名探偵と呼ばれていたが、部活動としてやっている剣道にのめり込み、探偵業がおろそかに。

しかし、剣道の腕前は一級品で、どちらかと言うと、頭脳派より行動派だ。平次も東京に上京して新一と同じ帝都大に・・・と思っていたのだが、親や幼馴染に反対され、今は大阪の^{エイリン}営林大学経済学部、在学中だ。

・・・と。話を戻そう。

「そうやつ！工藤！」

「んあ？なんだ。」

明らかに眠いですって顔で返事をした新一は明らかに不機嫌だ。

「封筒に書いてあった、住所やけどな、全てデタラメ。名前も何処にでもあるありきたりな名前やさかい、分からなかった。」

苦笑で警察に調べてもらったことを言うと、新一はさも嫌味そうに鼻で笑った。

「ふん。当たり前じゃねーか。わざわざ一人ひとり名前を変えてやがんだ。住所だって名前だってあてになんねーよ。」

「そやけどなあ・・・。」

平次はトホホとした顔でフライパンの上ののっているベーコンをひっくり返したのだった。

「で。その三葉駅の『パール』って何処やねん。」

「ああ、そこはな、米花駅の・・・4つ向こうだ。確か、コーヒーとシフォンケーキが旨いので有名のはず。」

新一は頭の片隅にある付近の地図を引っ張り出し、思い出した。そのマスターオススメ、ミックスブレンドはなかなかの味だったはずだ。

そこまでは聞いてらんのやけど・・・。

平次は苦笑を顔に乗せながら出来上がった朝食を運んだ。

内容は焼き立てホヤホヤパン、さっきまで焼いていた目玉焼きとベーコン、小さいがサラダなんかもあったりする。

「へえ。よく家にこんな食材があったな。」

感心したように言った後、冷めてしまったコーヒーを啜ってから新一はテーブルに着いた。

「アホッ！おまえんとこの冷蔵庫に入ってたのは卵と調味料だけやつ！これはほとんど俺が買ってきてん。感謝しーや」

呆れを通り越して感心したように平次はため息をついた後、捲くし立てるように言い張った。誤解されては困る、と。

実は新一、全くとっていいほど食事、食欲と言うものに疎いだ。

そのおかげで大学生男子の平均身長にとどいていないし、腰も女性とほぼ同じぐらい細い。平次としては同じ大学生として、見ていられないのであった。

「うーん、まあ、最近事件が頻繁に起こってたからなあ。ほとんど外食だったし。家には寝に帰って来るだけだった感じだったな」

俺、この家で、死体は見つけとうない・・・。

それは今日の晴天には不向きな平次の重々としたため息だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0618g/>

物語に登場する主人公は必ず美形である。

2011年10月5日18時56分発行